

さくらじょう 佐倉城跡

－発掘から見た幕末の武家屋敷－

嘱託調査研究員 小 牧 美 知 枝

はじめに

平成19年度は、佐倉城における武士団の屋敷跡と城下町の町家の一部である弥勒町遺跡の発掘調査を実施した。同年度に武士と町人の関連遺跡を比較できる機会が得られたため、今回は同時発表とした。

遺跡の位置と環境

佐倉城は印旛沼の南岸、鹿島川の右岸台地上に位置し、幕府の重鎮堀田氏の居城としてよく知られた城である。城は西の台地先端部に本丸を配し、台地続きに二の丸・三の丸を構え、大手門から延びる城下の町並みは、鍵手状の道や木戸を設けるなどの設計がされている。

城は『江戸東方の守り』として、初代の藩主土井利勝によって慶長16年（1611）から築城が開始され、元和2年（1616）に完成した。この時期に築かれた城が佐倉城の原形といわれ、以後明治維新まではほぼそのままの形で維持されてきたと伝えられる。

今回、当センターが発掘調査を実施した地点は、三ノ御門から大手門へと通じる広小路の北側、通称「天神曲輪」と呼ばれる地区である。同地区は絵図から勘定所、会所、上級武士団の屋敷があった地区とされ、過去にも度々調査が実施されている。天神曲輪西側が佐倉城第6～8次調査区、東側が佐倉中学校敷地内として調査が行なわれ、最近では平成19年度に校舎建替えに伴う発掘が実施されている。

ここでは、平成5年・8年に実施された同校の給食室建設に伴う調査や体育館建替えに伴う調査で得られた成果を援用しながら、天神曲輪の東側部分について明らかになった点を報告したい。

遺跡の概要

大手門北側に隣接する同地区では、東よりの部分で屋敷に伴う礎石建物跡2棟、地下蔵3基、水溜状

遺構1基、柵列状遺構、溝などが検出された。そこからは陶磁器や銅製品などの日常生活用具と共に、手工業生産に関わる^{るつぽ}埴塼や炉壁の破片なども出土している。

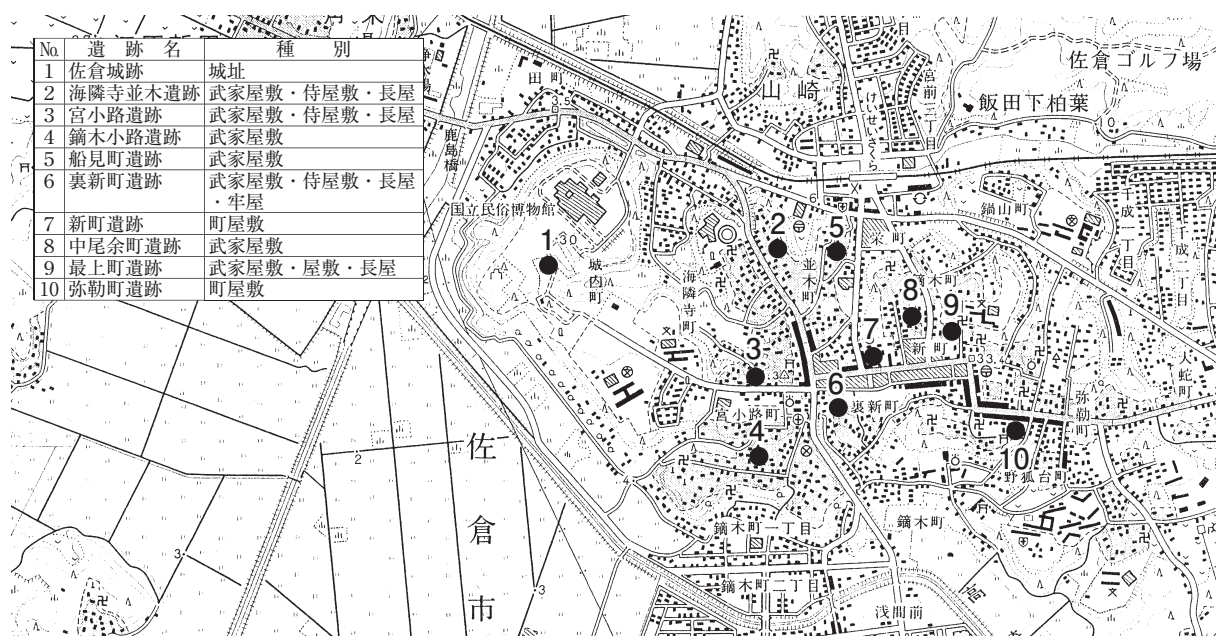
天神曲輪中程の調査地点では、広小路と平行する建物跡3棟や住宅地と道を区画していたと思われる溝・柱穴などが検出された。井戸や方形土坑からは、大量に投棄された18世紀後半～19世紀代の陶磁器類や瓦などが出土したが、高級な磁器類や徳利などの酒瓶類は少なく、質素な生活が想像される。

今回の調査では井戸14基と方形土坑、それに体育館部分で検出された塀の延長と思われる柱穴列や鍛冶遺構なども確認された。遺物はコンテナ60箱あまりにおよび、大量の瓦や陶磁器のほか、銀製のキセルや青銅製の京風^{かんざし}簪など注目される遺物も出土した。しかしながら、生活用具のなかでも高級な色絵^{いろえ}磁器は極めて少なかった。

まとめ

天神曲輪は上級武士団の居住域と考えられているが、出土した食器類から、日常生活は比較的質素なものが想像される。また、出土した鍛冶・鑄造関連遺物は、同地区内に工房施設が存在したことを暗示し、屋敷地で何らかの手工業生産が実施された可能性を示唆する。

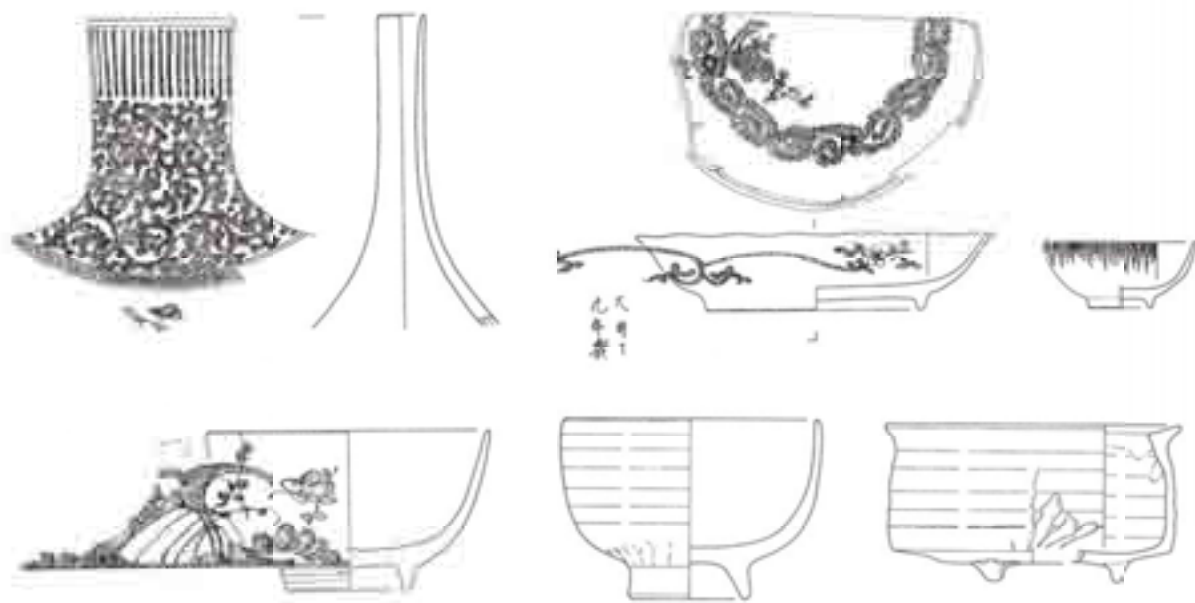
さらに、本地区と同様に、天神曲輪西の佐倉城7次調査でもコンテナ約150箱の瓦が出土しているが、国立歴史民俗博物館のある^{しいのきくるわ}椎木曲輪からの出土は少ないようである。なぜ大手門よりの天神曲輪に大量の瓦が廃棄されたのであろうか、これらの点が疑問として残る。



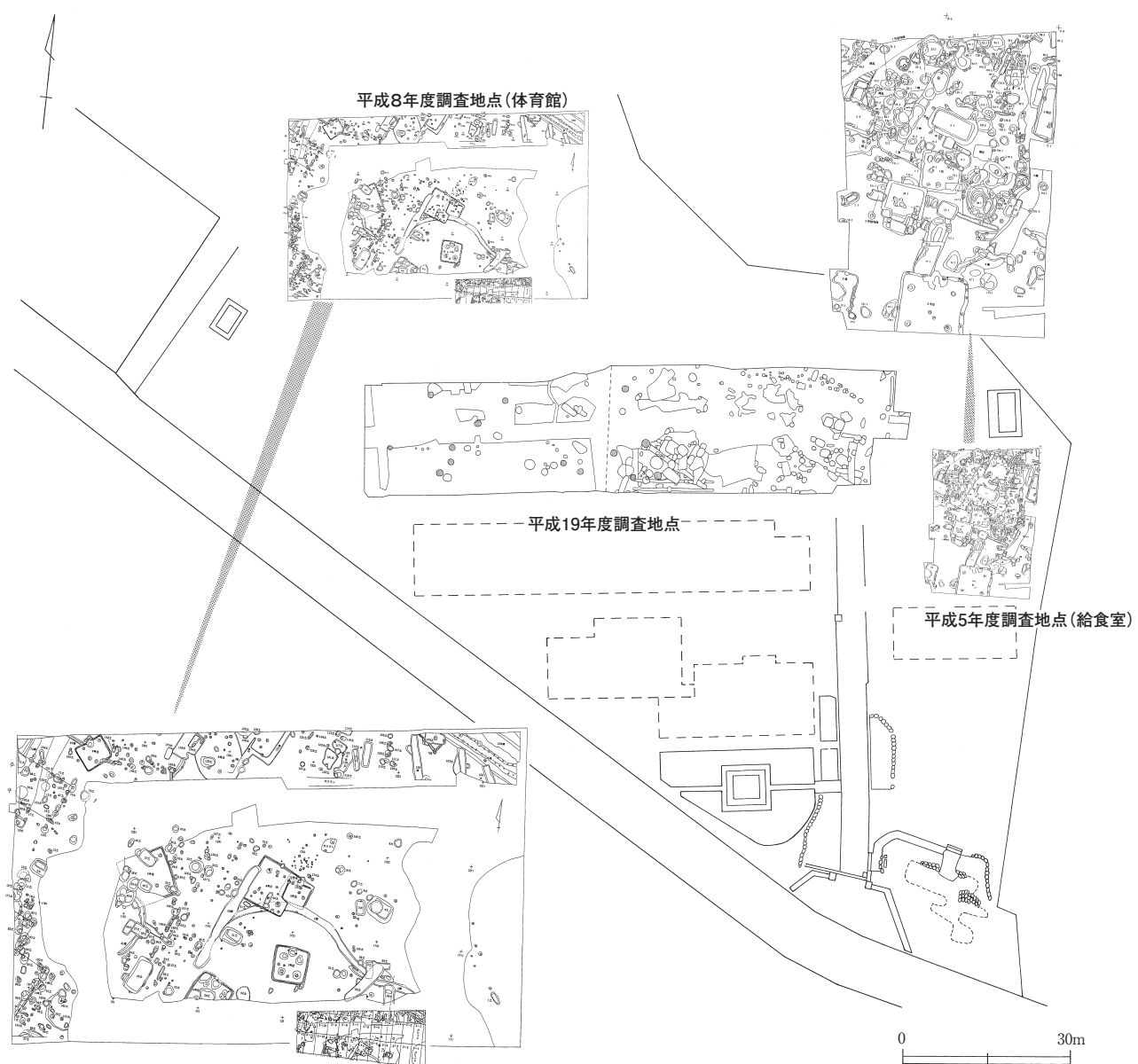
第1図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)



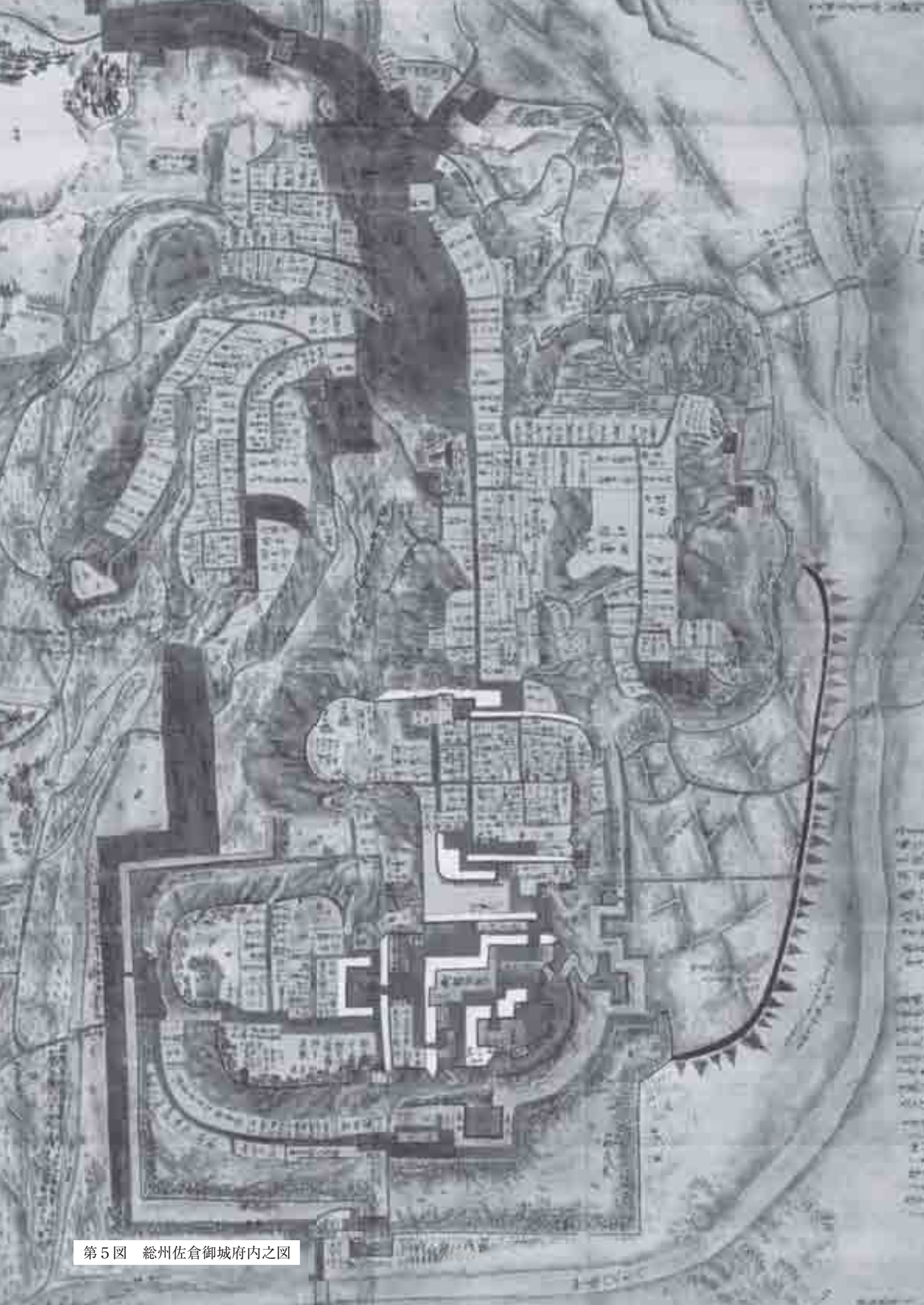
第2図 佐倉城跡調査地点



第3図 平成8年度調査地点出土遺物 (S=1/3)



第4図 佐倉中学校内調査地点 (S=1/1,200)



第5図 総州佐倉御城府内之図